

2020年ミレジム速報 -2020年9月22日
爽やかに成熟したボジョレーワインがお待ちしています

2020年は、分野を問わず誰にとっても未曾有の年となりました。ブドウ栽培も例外ではありません。1992年に成熟ネットワーク（Le réseau Maturation）が設置されて以来、2020年は2003年に次いでもっとも早い成熟を記録した年となりました。この極めて早い成熟と乾燥した夏を合わせると、「究極のミレジム」と言えるかもしれません。ロックダウンした人々と同じように、ブドウ樹もこの難しい時期をうまく乗り越え、非常に暑い夏をよく耐えました。ブドウ樹の健康状態は並外れて良好で、今年もまたガメイ種は気候変動に高い順応性を見せてくれました。早い成熟に合わせて、今年は8月20日がブドウの収穫開始日に決定されたため、栽培農家はその日までにタンクの準備を整えることを余儀なくされました。ブドウの成熟度の判断は各々に委ねられています。畑の標高や日照量、そしてワイン作りの方針は造り手ごとに違うからです。また、ボジョレー地方はシャンパーニュ地方と並び、収穫の大半が手摘みで行われる唯一のワイン産地です。2万5000人もの収穫人を迎え入れるにあたり、この前代未聞の状況下において最良の環境を整えるには、通常の倍の努力が必要とされました。

穏やかな冬のおかげで萌芽は早くも3月末に始まり、その後4月、5月も気温が高く、乾燥して日照量の多い日が続きました。6月は、前半は寒気と雨、その後は暑くて乾燥し、日照量も多くなり、気候が大きく変わった月となりました。開花も非常に早く、5月20日前後から始まりました。最後の開花が平均5月30日だったことから、いかに開花のスタートが早かったかがわかるでしょう。色づきは平均して7月18日前後に始まりました。この段階で、すでにばらつきが顕著に見受けられました。7月は、特に最後の10日間が比較的暑く、乾燥し、雨はごく稀で、降っても場所にばらつきがありました（1964年以来、3番目に乾燥した7月となりました）。8月は、最初の20日間は猛暑が続き、8月28日以降は涼くなって、気候が大きく変化した月となりました。降雨はイレギュラーで例年の平均を大きく下回り、またブドウ畑によって一様ではありませんでした。「2020年はあらゆる側面で、特別な年となりました。冬らしい冬はなく、その後ブドウは水分不足や乾燥にさらされました。自然は女王のような貴婦人。仕事のやり方を工夫して彼女に合わせるしかありません。つまり、まずは土を見直します。ブドウの木がより深く根を張り栄養を取りに行くように仕向けるのです。葉の表面にも注意し、土壌に水分が保たれるよう気をつけます。今や温暖化のことを考慮に入れないといけません」とドメーヌ・デ・カドル Domaine des Cadoules（ムーラン・ナ・ヴァン、ブルイヤー、レニエ）の造り手、ポール・ラブリユイエール Paul Labruyère氏は語ります。



2020年の収穫は、区画によってかなりばらつきがあることが特徴的です。北部から南部までテロワールが多彩であること、ブドウ樹の樹齢や日照条件が異なるので区画ごとに乾燥への耐性が異なること、そして、場所によっては雨がばらついたことが原因です。これほど水分不足によるストレス指標が話題になったこともありません。ボジョレー地方には非常に豊かなテロワールがあり、それが成熟度の違いを生み出し、生産者たちはそこに合わせることを余儀なくされました。7月末の猛暑および8月の10日から20日にかけて最高気温が非常に高かったことからブドウの日焼け現象が何回か起きましたが、それにも関わらず大半の生産者は完熟し、見た目も美しいブドウを収穫することができました。収穫はおよそ1ヶ月間、比較的良好な条件のもとで行われました。SICAREX（ボジョレーのブドウ栽培・醸造研究所）のディレクター、ベルラン・シャトレBertrand Châtelet氏は「収穫したブドウはどれもフェノール成熟がきちんと進んでいましたので、タンクの中のガメイ種はバランスが取れ、しっかりと色づきし、どちらかと言えば黒いフルーツを感じさせるエレガントなアロマのあるワインとなっています。シャルドネ種に関して言えば、造り手たちは自分たちの持つ知見や経験を最大限に活用して、バランスが最適な状態を見極めて収穫を行い、爽やかさを保ちました。この段階でアルコール発酵は終了し、マロラクティック発酵が始まります。これらの発酵によってワインはまろやかになり、イベント向けのボジョレーなら数週間、個性的で高品質のボジョレーなら数ヶ月から数年かけて、ミレジムにふさわしい際立った独自性と多種多様な味わいが生み出されるのです」とコメントしています。

ドメヌ・ロンジェールDomaine Longère（ボジョレー・ヴィラージュ）の造り手であるジャン＝リュック・ロンジェールJean-Luc Longère氏は次のように語っています。「シャルドネ種は素晴らしい開花の時期を経て、多くの着果が認められました。ブドウ果は見た目に美しく、爽やかさを得るのに適度な酸を含んでいました。今年のキーワードは、辛抱の一言に尽きます。収穫の準備も万全を期す必要がありました。なぜならブロンズ色に近いほどの黄金色の美しい光沢を得るためには、ブドウが凝縮を高める必要があったためです。アルコール発酵は順調に進み、これからマロラクティック発酵が始まるところです」

ピエール・ドレワイン生産者セラーの会長、シルバン・フラッシュSylvain Flacheは「成熟不良を起こすほどの連日の猛暑の後、8月10日に降った雨は事態を好転させました。技術スタッフは忍耐を強いられましたが、その忍耐力はブドウ作りに関わる全ての人に波及し、そのおかげでブドウは見事に成熟しました。樹齢の高いブドウ樹と深さのある土壌が良い結果を生んでくれました。アルコール発酵に関してはかなりの調整を要しました。標高や土壌の深さ、ブドウ樹の樹齢などの諸条件で、区画ごとに違った特徴を見せていたからです。最初の試飲では、赤ワインはまろやかでフルーツの香りがふんだんにあり、非常に深い色調を見せていました。ロゼワインは、まさに小さなアロマ爆弾。そして白ワインに関しては乾燥のためシャルドネ種の収穫が遅かったため、マロラクティック発酵が完了するのを待ちたいと思います」とコメントしています。



2020年の収穫は、量としては最近の平均からすると少なめという位置付けになります。一方、質の点から見ると、非常にバランスが取れた爽やかさのある仕上がりとなっています。大自然と折り合いをつけ、単一のブドウ品種からのワイン造りを行うボジョレー地方の生産者たちの知見と長年の経験に裏打ちされたノウハウが浮き彫りとなった形です。最初の段階で試飲したワインはすっきりして飲みやすく、爽やかさと確かな成熟度が感じられます。

「私たちは、あらゆる観点から特異な年を過ごしています。田舎で土を相手に仕事をする中で、幸いにも地に足が付き、良識が保たれていますが、将来は贅沢なこととされるかもしれません。現在の状況で見ると、私たちはボジョレーにおける偉大なミレジムの年を迎えようとしているように思われます。ガメイ種は今年もまた、気候変動への高い順応性を見せてくれました。それは安心材料であるし、将来に対するプラスポイントです。世界経済が不確定要素に支配され完全に混乱している現在において、ボジョレーが発展し続けていけるよう、私たちは最大限の努力を払う所存です。ここ2年の実績が、私たちが正しい方向に向かっていることを示されています」。このようにボジョレーワイン委員会会長のドミニク・ピロンDominique Piron氏は締めくくりました。

このリリースについてのお問い合わせ

ボジョレーワイン委員会 日本事務局

beaujolais@audacejapan.com

Suivez les vins du Beaujolais



www.beaujolais.com

#vinsdubeaujolais

Photothèque Beaujolais : <https://extranet.beaujolais.com/phototheque-categories>

Crédits photos mentionnés sur chaque photo.

ボジョレーワインについて

リヨンとブルゴーニュ地方の間に位置し、ボジョレー地方のワイン畑は14,500ヘクタールに及び、ボジョレーの12のアペラシオンには2,000以上のドメーヌと9つの協同組合醸造所、200ものネゴシアンが展開しています。ボジョレーの12のアペラシオンは、その華やかなワインに際立って表れています。北に位置し100%赤ワインを扱うクリュ、ブルイイ、シエナ、シルーブル、コートドブルイイ、フルーリー、ジュリエナ、モルゴン、ムーランナヴァン、レニエ、サンタムール。赤、白、ロゼの3色と新酒を扱うボジョレー、ボジョレーヴィラージュです。